

麻田雅文

## 中東鉄道警備隊と満洲の軍事バランス：1897-1907年

### はじめに

本論で扱う中東鉄道警備隊（Охранная стража КВЖД、以下警備隊と略す）は、字義どおり中東鉄道の警備を行った部隊である。と言っても、警備隊は単に鉄道沿線の警備業務に従事したのにとどまらず、義和団蜂起や日露戦争に従軍し、第一次大戦ではカフカースや東部の戦線に投入されるなど、満洲に留まらない活発な軍事行動を展開した。そのため警備隊に関する研究は各国で散見され、中国では薛が300頁を越える『中東鉄道護路軍と東北辺境政局』と題する単著を発刊している<sup>1</sup>。戦闘記述にやや重きを置くものの、中露の史料を駆使した通史として高い水準にある研究書である。一方、ロシアでもいくつかの小論が発表されている<sup>2</sup>。先行研究の特徴として、ロシアにおける研究は警備隊の勲を高く評価するきらいがある。逆に、薛をはじめとする中国の研究では、警備隊は中東鉄道の武力発動を担保するものとしてその侵略性を強調する姿勢が根強い。こうした研究とは別に、警備隊には『偉大なる王(ワン)』の著者バイコフ（Н. А. Байков）や、後に白衛軍の指導者となるデニーキン（А. И. Деникин）やコルニーロフ（Л. Г. Корнилов）といった人物たちが在籍したことから、彼らの自伝や伝記を通じても警備隊について言及がなされる。

警備隊に関する一次資料は、ロシア連邦国立文書館（以下 ГАРФ）と、ロシア国立歴史文書館（以下 РГИА）のフォンドにそれぞれ保管されている。また第一次大戦の前線における警備隊の軍事行動に関する史料はロシア国立軍事歴史文書館（РГВИА）にある<sup>3</sup>。管見の及ぶ限りでは、デイヴィッド・ウルフ（D. Wolff）やウラジーミル・ダツィシェン（В. Г. Дацышен）はРГИАの史料を自著に用い、ГАРФの史料を用いたのはミナコフの小論のみである<sup>4</sup>。余

<sup>1</sup> 薛銜天『中東铁路护路军与东北边疆政局』社会科学文献出版社、1993年。なお薛の見解は、満洲におけるロシア人について精力的に研究しているヴァシレンコも下記で紹介している。*Василенко Н. А. История Российской эмиграции в освещении современной китайской историографии. Владивосток, 2003. С. 41.*

<sup>2</sup> ①*Сухачева Г. А. Охранная стража КВЖД и хунхузы (1897-1920) // Каневская Г. И. (ред.) Россияне в Азиатско-Тихоокеанском регионе. Сотрудничество на рубеже веков. Т. 2. Владивосток, 1999. С. 110-117.* ②*Корнева Л. В. Из истории военной охраны КВЖД // Дубинина Н. И. (ред.) Дальний Восток России - Северо-Восток Китая: Исторический опыт взаимодействия и перспективы сотрудничества. Хабаровск, 1998. С. 55-57.* ③*Иконникова Т. Я. Проблема охраны КВЖД в связи с мобилизацией на фронт частей Заамурской пограничной стражи в 1915 г. // Дубинина Н. И. (ред.) Указ. соч. С. 58-61.* ①は帝国主義の表象といった中国側の警備隊に対する見方も紹介するのに対し、②は警備隊を顕彰する論調が強い。③は第一次大戦に際して、兵力不足のために警備隊がホルヴァート中東鉄道管理局長の反対を押し切って前線に動員された点を描く。②と③には注が付されていない。

<sup>3</sup> *Снежко Н. Г. Фонды российского государственного военно-исторического архива. М. 2001. С. 127.*

<sup>4</sup> David Wolff, *To the Harbin Station: The Liberal Alternative in Russian Manchuria, 1898-1914* (Stanford: Stanford University Press, 1999); *Дацышен В. Г. Русско-китайская война: Маньчжурия*

談になるが、日本側も警備隊の資料を一時期大量に保管していた。1922年に南満州鉄道の  
大連図書館が警備隊から購入した1万8千冊の蔵書、通称オゾ（офицерство Заамурского  
округа、略称 OZO）文庫がそれである<sup>5</sup>。この蔵書は大連図書館が管理して目録も発行した  
が<sup>6</sup>、日本の敗戦に伴う混乱の中で行方不明となっている。

先述したように、警備隊の研究はその存在自体を非難する中国側と、警備隊の武威を称  
揚するロシア側の二項対立の枠組みの中で行われてきた。ここでは、警備隊が本来どのよ  
うな経緯から満洲に派遣されて、大規模に拡大していったのかという根本的な問いがなさ  
れていない。そこで本論は、警備隊が満洲に着任した1897年から、日本と清、ロシアが満  
洲における日露戦争後の兵制を整えた1907年までを中心に、「拡大」をキーワードとして  
警備隊の成立を論述する。警備隊はその草創期には750名で編制されたが、日露戦争前  
には兵員2万を越える規模へと拡大した。満洲に駐留した初めての外国軍隊が、かくも短期  
間に拡充していった事は、地域の軍事バランスに影響を及ぼすのは必然と言えよう。ゆえ  
に本論は、警備隊と後発の日本の独立守備大隊、そして東三省総督派遣後の満洲における  
清の兵数を比較して、警備隊が満洲という地域に与えた軍事的な影響を相対的に考察する。  
このように日清の兵力と警備隊を比較する視点は先行研究では見られない。

警備隊を通じて軍事バランスに言及するならば、兵数に着目して叙述するのみでは不十  
分だという指摘もなされよう。確かに、軍事力は当事国の政治的影響力といったマクロな  
要因から、装備、士気、配置等といったミクロな要因に至る様々な要素が検討されて初め  
て導き出される。しかし政治力や士気は数字で表せるものではなく、装備や配置で軍事力  
の優劣を判定するのは手に余る。ゆえに、本論は客観的な評価の容易な兵数に着目した。

なお警備隊は1901年1月に名称を変更しているが、本論は便宜上、警備隊の呼称を一貫  
して使用する。本文中の日付は露暦であり、西暦に戻すには19世紀で12日、20世紀では  
13日を加算する必要がある。また、ロシアの度量衡の単位1ヴェルスタは500サージェン、  
すなわち1.067キロメートルに換算される。

## 1 中東鉄道警備隊の成立

鉄道警備隊の構想の萌芽は、中東鉄道の敷設をめぐる1896年1月11日のプリアムール総  
督ドゥホフスコイ(С. М. Духовской)の上奏と、それに対する同年3月31日の蔵相ヴィッテ(С.  
Ю. Витте)の反論の中に見られる。ドゥホフスコイは自らが歩兵師団参謀長として鉄道敷設  
に従事した経験や、ウスリー鉄道の例を持ち出して、「外国人労働者に代わる、秩序ある頑

---

1900 г. СПб., 2000; Минаков В. П. Н. М. Чичагов: Начальник Заамурского округа ОКПС в 1903-1910 годах // Вопросы истории. 2004. №5. С. 140-144.

<sup>5</sup> 河田いこひ「オゾ文庫: 満鉄に買い取られたロシア軍所属図書館」『近現代東北アジア地域史研究会 News Letter』第7号、1995年、27頁。

<sup>6</sup> *Общество Южно-Маньчжурской железной дороги*. Каталог русских книг. Дайрен, 1930.

健なロシア軍人を有することなく、労働者の秩序と賃金の急騰を抑え込むのは困難<sup>7</sup>であるから、中東鉄道にも鉄道大隊は不可欠であると説いた。これに対し、ヴィッテは軍人の参加が工事に良い影響を及ぼすことは認めたが、一個ないし数個大隊が満洲に派遣されて新聞雑誌に取り上げられれば鉄道敷設が相当複雑化する、と懸念を表明した。そのため、もし派遣するならば満洲から遠く離れた軍管区の下士卒を予備役に編入して、最小限の武器しか持たさず、軍人が鉄道建設に従事していることは完全に秘密にするという措置が必要であるという意見を添えた<sup>8</sup>。この鉄道大隊をめぐる議論こそが、警備隊の濫觴と考えられる。しかし、中東鉄道の敷設に関する 1896 年の露清交渉で、清の代表李鴻章はロシア側が提起した鉄道によるロシア軍の無制限の通過と使用には反対し<sup>9</sup>、彼の意見は露清同盟第 5 条と中東鉄道敷設契約第 8 項に反映された。軍人の通過にすら過敏な清の態度は、鉄道大隊の投入を困難にしたと推測される。実際、1898 年末に中東鉄道副理事長のケルベジ (С. И. Кербедзь) は警備隊を労働力に用いることを中東鉄道理事会に提案したが、警備隊の規律と軍事装備の観点から支持が得られず、1899 年 1 月 27 日に否決された<sup>10</sup>。警備隊とは別に、工兵からなるザアムール鉄道大隊 (Заамурская железнодорожная бригада) が作られるのは 1903 年 3 月 25 日の裁可を待たなければならない。こうして設けられた鉄道大隊は、日露戦争勃発後の 1904 年 2 月 2 日に中東鉄道管理局の指揮下に置かれ、鉄道の修繕や破壊に従事した<sup>11</sup>。

一方、ロシアの技師や労働者、そして鉄道を警備する人員を満洲へ送り込む計画自体は放棄されなかった。理事会は 1896 年の敷設契約第五項「清国政府は全ての攻撃から鉄道と職員の安全を保障する措置に配慮する。会社は鉄道の管理などで必要と認められる場合には、自らの選択で外国人もしくは地元民を雇用する権利を有する」<sup>12</sup>という条項を拡大解釈した。1897 年 5 月 10 日、理事会は警備隊を編制する決議を行い、理事のロマノフ (П. М. Романов) が陸軍の代表と会談して、正規軍とカザークから兵員を借り受けた。また警備隊

<sup>7</sup> Первые шаги русского империализма на Дальнем Востоке (1888-1903 гг.) // Красный архив. 1932. Т. 3(52). С. 90. (佐々木揚編訳『十九世紀末におけるロシアと中国:「クラスヌイ・アルヒーフ」所収史料より』巖南堂書店、1993 年、74 頁。本文中の訳文は麻田による。)

<sup>8</sup> Там же. С. 90. (佐々木『十九世紀末におけるロシアと中国』、88 頁。)

<sup>9</sup> Глинский Б. Б. Пролог русско-японской войны: Материалы из архива графа С. Ю. Витте. Пг., 1916. С. 36-37.

<sup>10</sup> Нилус Е. Х. Исторический обзор Китайской Восточной железной дороги: По поручению Правления Общества и под ред. спец. комиссии. Харбин, 1923. С. 508.

<sup>11</sup> Русско-японская война 1904-1905 гг. Работа военно-исторической комиссии по описанию русско-японской войны. Т. 7(2). СПб., 1910. С. 83-84. 編入の日付は、尼羅斯撰、朱與忱譯『東省鐵路沿革史』文海出版社、1987 年に所収の“Short chronological list of the most important events in the life of the Chinese Eastern Railway during the elapsed twenty-five years (1896-1923),” p. 10. に拠る。この英文の年表はニルスの本と同じく中東鉄道の開設 25 周年を記念して編纂された年表の英語版が、転載されたものだと考えられる。

<sup>12</sup> Мясников В. С. (ред.) Русско-китайские договорно-правовые акты (1689-1916). М., 2004. С. 213. ニルスは敷設契約の第 6 項に基づくとしているが、スハチョーヴァバが記すように、むしろ第 5 項の方が該当すると考えられる。Сухачева. Указ. соч. С. 112.

員には陸軍が武器を与え、動員その他の通常任務を免除することも取り決められた<sup>13</sup>。同年6月10日の皇帝の裁可を経て、7月20日に理事会は第四ザカスピ歩兵大隊隊長であるアレクサンドル・ゲルングロス (A. A. Гернгросс) 大佐を警備隊の隊長に任命する。兵卒はカザークから募集され、テレク、クバン (2 中隊)、オレンブルグ、混成部隊の 5 中隊、750 名で編制された<sup>14</sup>。こうして組織された第一陣は、1897 年 11 月 1 日にオデッサを義勇艦隊の汽船で発ち、長崎を経由して 12 月 26 日にウラジオストクに到着した。しかし、一梯団に値する第一陣の人数では不足であるとして、理事会は先遣隊が現地に到着する前の同年 10 月には増派を決定した。新たに編制された二梯団に当たる 1390 名のカザークは、1898 年 4 月にオデッサを発った<sup>15</sup>。同年 12 月にはプリアムール軍管区の歩兵 250 名も編入され、これが警備隊で最初の歩兵となる<sup>16</sup>。警備隊の指揮権は、中東鉄道技師長のユーゴヴィッチ (A. И. Югович) が持っていた<sup>17</sup>。文官である一般の技師たちと軍出身の警備隊員の間では初め対立があったが、ゲルングロスと技師長など幹部の関係は良好であったようだ<sup>18</sup>。

第一陣が到着するまで、建設者たちの警備に当たっていたのはドゥホフスコイが派遣した 800 名の兵士である<sup>19</sup>。警備隊はこの部隊と交代して、鉄道建設の各工区に赴き警備に当たった。鉄道の完成後は線路脇に哨所が建てられて、当初は 3 人から 4 人、後には 5 人から 20 人の隊員が配備されて、哨所から哨所へ連続的に偵察が行われる<sup>20</sup>。その範囲は片側 25 ヴェルスタを直接の範囲とし、75 ヴェルスタを勢力圏と位置づけた<sup>21</sup>。またハルビンからハバロフスクまでの松花江沿いにも哨所を設けて警備を行い、会社の従業員と荷車を護送し、電線も敷設した<sup>22</sup>。1903 年 10 月 1 日には、警備隊から人員を引き抜いて 4 署から成る警察も組織される<sup>23</sup>。警備隊司令部は初め旧ハルビンに置かれ、全線を 3 区に分けて警備を分担した。西部線の本部は齊齊哈爾に隣接する富拉爾吉駅に、東部線は一面坡駅、南満洲支線では鉄嶺駅に本部が置かれている<sup>24</sup>。

隊員たちは好条件で迎えられた。正規軍で年に 2 ルーブル 70 コペイカを受け取るだけだったのが、警備隊の兵卒は月給 20 ルーブル、下級将校は月に 40 ルーブルが約束された。

<sup>13</sup> David Wolff, *op. cit.*, p. 65.

<sup>14</sup> Голицин В. В. Очерк участия охранной стражи Китайской Восточной железной дороги в событиях 1900 года в Маньчжурии. Харбин, 1910. С. 5.

<sup>15</sup> Нилус. Указ. соч. С. 506. その構成はドン (3 中隊)、オレンブルグ (3)、クバン (2)、テレク (1)、ウラル (1) の計 10 中隊である。

<sup>16</sup> Нилус. Указ. соч. С. 508.

<sup>17</sup> Там же. С. 503.

<sup>18</sup> Орлов Н. В. Замурцы 1898-1917 гг. Исторический очерк в пяти частях (3) // Россияне в Азии. 2000. №7. С. 273-274. この論文は警備隊員だったオルロフが 1939 年にハルビンで地下出版した警備隊の通史全 5 部の内、第 1 部が 3 号にわたって紹介されたものである。

<sup>19</sup> Нилус. Указ. соч. С. 38.

<sup>20</sup> Там же. С. 509. Мелихов Г. В. Маньчжурия далекая и близкая. М., 1991. С. 104.

<sup>21</sup> Мелихов. Указ. соч. С. 106.

<sup>22</sup> Корнева. Из истории военной охраны КВЖД. С. 125-127.

<sup>23</sup> Нилус. Указ. соч. С. 538.

<sup>24</sup> Орлов. Замурцы 1898-1917 гг. (1) // Россияне в Азии. 1998. №5. С. 93.

隊長のゲルングロスになると年俸1万5千ルーブルである<sup>25</sup>。こうした警備隊の諸経費は全て会社が負担し、1899年までの支出は1497万9211ルーブル37コペイカとなった<sup>26</sup>。また現役将校は中東鉄道警備隊へ派遣中は一時的に予備役に編入しており、その勤務年限は現役と同様の取り扱いをされていた<sup>27</sup>。彼らには龍の徽章が描かれた武器と制服も支給されたが、これらは敬虔なカザークの間で「悪魔の作りし物」として忌み嫌われた。制服の一部も正規軍と違い黄色であった。ウルフは、上記のデザインの手直しは満洲がロシアにとって「黄ロシア」であることを暗示していたと考えている<sup>28</sup>。しかし黄色地に龍（黄龍）は清の国旗と同じデザインであり<sup>29</sup>、中東鉄道が露清友好の事業であることを演出するためにとられた措置ではないだろうか。

増員を重ねた結果、警備隊は義和団蜂起直前の1900年6月1日の時点で将校62名、歩兵1950名、騎兵2450名、馬匹2005頭で編制されるに至った<sup>30</sup>。一方、この時期の満洲における清の兵力を、ダツィシェンが中国語文献やロシアの北京駐在武官ヴォガーク（К. И. Вогак）の報告を基に約5万人と推定している<sup>31</sup>。義和団蜂起を契機に両者は満洲を舞台にして戦闘を繰り広げることになる。

## 2 義和団蜂起と日露戦争

体制を整えつつあった警備隊が迎えたのが義和団蜂起である。満洲におけるこの蜂起の詳細な経緯と警備隊の果たした役割は、ジョージ・レンセン（G. A. Lensen）<sup>32</sup>やダツィシェンの充実した研究がある。また満洲における戦闘の天王山に当たるハルビン包囲については別に発表した<sup>33</sup>、本論では義和団蜂起と前後して警備隊が急激に拡大したことを確認するに留める。警備隊はすでに蜂起前から鉄道敷設に反対する住民や馬賊にとって標的とされていた。1898年8月に2名のカザークが殺害されたのを皮切りに、99年にも西部線や南満洲支線を中心に隊員や労働監督が殺傷され、1900年初めになると武力衝突は日常的なものとなっていた<sup>34</sup>。不穏な満洲の情勢を見てとったヴィッテは増派に乗り出し、1900年5

<sup>25</sup> Wolff, op. cit., p. 69.

<sup>26</sup> *Общество Китайской Восточной железной дороги. Общий обзор к отчету по постройке Китайской Восточной железной дороги: По железнодорожному предприятию. 1897-1903 гг. СПб., 1905. С. 65.*

<sup>27</sup> 弓場盛吉『東支鉄道を中心とする露支勢力の消長』上巻、南満洲鉄道株式会社哈爾濱事務所運輸課、1928年、55頁。

<sup>28</sup> Wolff, op. cit., p. 66.

<sup>29</sup> 「黄龍旗」は、1862年に艦船の識別のため制定された。小野寺史郎「中国最初の国旗:清朝・黄龍旗について」『中国研究月報』第57巻10号、2003年、22-23頁。

<sup>30</sup> *Голицин. Указ. соч. С. 112.*

<sup>31</sup> *Дацзышен В. Г. Военный потенциал Северо-Восточного Китая в кон. XIX в. // Светачев М. И. (отв. ред.) Международные отношения в Тихоокеанском регионе в XIX-XX веках. Хабаровск, 1997. С. 70.*

<sup>32</sup> George A. Lensen, *The Russo-Chinese War* (Florida: Diplomatic Press, 1967).

<sup>33</sup> 拙稿「義和団蜂起とハルビン」『セーヴェル』第21号、2005年、17-26頁。

<sup>34</sup> *Дацзышен. Русско-китайская война. С. 44-45.*

月中旬には警備隊を5千人に拡大することで清政府と合意した。彼は蜂起の勃発する6月には2日に6千人、16日に7千人、22日に1万1千人と、警備隊増強の裁可を矢継ぎ早に皇帝から得た。また陸軍大臣との協議の上、プリアムール軍管区から更に兵を借り受ける交渉も進められた<sup>35</sup>。6月16日には、現地のゲルングロスとサハロフ (В. В. Сахаров) が連名で、中東鉄道の有効な保障には沿線に計1万1千人の騎兵と歩兵が必要だとロマノフへ電送している<sup>36</sup>。ヴィッテの性急な要望はそれに対応したものであろう。しかし、承認された増派は間に合わず、その実行は義和団蜂起の制圧後に持ち越された形になる。

1900年の一連の戦闘で、隊員の将校は5名が戦死、7名が負傷、兵卒は141名が戦死した(負傷者は記載なし)<sup>37</sup>。清側の犠牲者はハルビンの戦闘だけでも約800名の戦死が認められる甚大なものであった<sup>38</sup>。しかしそれ以上に、ロシア正規軍が中東鉄道沿線を中心に満洲を占領して清軍を撃破したことは、地域の軍事バランスに大きく影響した。「庚子(筆者注:1900年)以後満洲に兵備なしと云ふも敢えて過言にあらざるべし。蓋し全く無きにあらず有るも露国の掣肘箝制を受け地方守備の任務を遂行し能はざるに因る」とは、日露戦争直後に書かれた清の兵備に対する日本側の評価である<sup>39</sup>。

警備隊では義和団蜂起で矢面に立って死闘を演じたことが殊勲とされ、1900年12月4日に大蔵大臣を長(Шеф)とする独立国境警備軍団の軍装が隊員に与えられた<sup>40</sup>。独立国境警備軍団とは、ヴィッテの主導のもと1893年10月15日の勅令により創立された部隊で、大蔵省が国境沿いの密輸と密出入国の防止のために隷属させていた<sup>41</sup>。警備隊の制服の色は改められて緑か黒となり、黄龍の徽章は廃止されて<sup>42</sup>、もはや隊員がロシア帝国の軍人であることが隠されることはなくなった。同年12月22日には、警備隊のゲルングロスとミシチェンコ(П. И. Мищенко)の両名に勲四等ゲオルギー勲章も授与される<sup>43</sup>。しかし、義和団蜂起は警備隊の員数不足と補強をロシア政府に認識させることにもなった<sup>44</sup>。例えば、陸軍大臣クロパトキン(А. Н. Куропаткин)は外務大臣ラムズドルフ(В. Н. Ламздорф)に宛てた1900年12月3日の手紙で、満洲におけるロシアの主要な目標を中東鉄道の完成であり、

<sup>35</sup> Глинский. Указ. соч. С. 110-111.

<sup>36</sup> Симанский П. События на Дальнем Востоке, прешествовавшие Русско-Японской войне. Ч. 2. СПб., 1910. С. 97.

<sup>37</sup> Голицин. Указ. соч. С. 363-368.

<sup>38</sup> Дацьшен. Русско-китайская война. С. 83.

<sup>39</sup> 遼東兵站監部『満洲要覧』丸善、1905年、80頁。原文に句読点と濁点を加えた。

<sup>40</sup> Полное собрание законов Российской империи (以下 ПСЗ) . Собр. 3-е. Т. 20. СПб., 1900. С. 1077 (№19316).

<sup>41</sup> Плеханов А. А., Плеханов А. М. Отдельный корпус пограничной стражи императорской России: 1893-1917. М., 2003. С. 25-27. 中東鉄道警備隊が編入される直前の1901年1月1日には、独立国境警備軍団は全7管区から成り、将校1079名、兵卒3万6348名、軍医(准医師含む)134名を数えた。Там же. С. 270-271.

<sup>42</sup> Rosemary K. I. Quested, "Matey" Imperialists? : The Tsarist Russians in Manchuria, 1895-1917 (Hong Kong: Centre of Asian Studies, University of Hong Kong, 1982), p. 100.

<sup>43</sup> Список офицерам, награжденным орденом Св. Великомученика и Победоносца Георгия за китайскую войну 1900-1901 гг. // Военный сборник. 1907. №4. С. 280- 281.

<sup>44</sup> Нилус. Указ. соч. С. 511.

鉄道が完成したら連絡運輸の安全確保であるとしている。だが、「警備隊は増強の後であっても、満洲に配置している我が軍の支援なくしてこの二つの課題をこなすことはできないと、私は確信を述べなければならない」<sup>45</sup>として、満洲に正規軍が駐留する根拠としている。大蔵省だけでなく陸軍からも警備隊は質量ともに不十分と見なされていた。

こうして、警備隊の増強と指揮系統の改編が開始された。ヴィッテは、軍装を支給した12月4日には隊員を1万6千人にまで増やす裁可も得て、ユーゴヴィッチに更に増派が必要かを問い合わせている<sup>46</sup>。最終的に、陸軍省との合意に基づいて警備隊を2万5千人にまで早急に増強することになり、新たに砲兵も加えられることになった。1901年5月18日には、警備隊を歩兵中隊55個・騎兵中隊55個・砲兵中隊6個・訓練部隊25個からなる4旅団に再編する事が裁可される<sup>47</sup>。指揮系統では、1901年1月9日の4項から成る勅令により、独立国境警備軍団に編入されて「特別管区」を形成することになった(第1項)<sup>48</sup>。また指揮権は技師長から大蔵大臣へと移行した(第3項)。こうして警備隊は正式名称を独立国境警備軍団ザアムール管区(Заамурский округ отдельного корпуса пограничной стражи)へと改める。改編により警備隊は一私鉄会社の警備員という偽装を解いて、ロシア軍の一翼に位置づけられたと言えよう。しかしながら、所属は変更されてもその経費は会社が負担し続け<sup>49</sup>、1910年代になっても会社の経営を圧迫することになる<sup>50</sup>。

上記の警備隊の再編にはゲルングロス大佐が転出して用兵の専門家であるディーテリス将軍(И. Я. Дитерихс)が当たったが、1903年1月21日に、警備隊をよりベテランに委ねる方針から、沿海州軍務知事を務めていたニコライ・チチャーゴフ(Н. М. Чичагов)中将が異動してくる<sup>51</sup>。将校の訓練不足が正規軍から嘲笑の種だった警備隊は、彼の下で「全ての戦闘単位関係の中で見本」<sup>52</sup>へと変貌した。こうして警備隊は日露戦争の開戦前に歩兵1万4872名、騎兵9128名、砲兵728名(砲26門)の計2万4728名を有する大部隊となった<sup>53</sup>。更に、日露の対立が先鋭化しつつあった1903年6月24日には、極東の軍備増強に関する陸軍の討議の中で警備隊の戦時編制が取り上げられ、ザアムール鉄道大隊を7千名に

<sup>45</sup> Боксерское восстание // Красный архив. 1926. Т. 1(14). С. 42 (佐々木『十九世紀末におけるロシアと中国』、351頁。本文中の訳文は麻田による。)

<sup>46</sup> Романов Б. А. Россия в Маньчжурии (1892-1906). Л., 1928. С. 280 (ロシア問題研究所訳『露西亜帝国満洲侵略史』ナウカ社、1934年、303頁。)

<sup>47</sup> Нилус. Указ. соч. С. 512.

<sup>48</sup> ПСЗ. Собр. 3-е. Т. 21. СПб., 1901. С. 23 (№19547).

<sup>49</sup> Плеханов. Указ. соч. С. 47.

<sup>50</sup> その額は年間800万ルーブルに達し、1910年以降の会社の黒字も警備隊の予算に費消されたという。Штейнфельд Н. Что делать с Манчжурией? Харбин, 1913. С. 12.

<sup>51</sup> Орлов. Заамурцы 1898-1917 гг. (3). С. 274. 日付は、“Short chronological list of the most important events in the life of the Chinese Eastern Railway during the elapsed twenty-five years(1896-1923),” p. 9. による。

<sup>52</sup> Мелихов. Указ. соч. С. 104.

<sup>53</sup> Русско-японская война 1904-1905 гг. Т. 1. СПб., 1910. С. 375. 砲兵数は同ページに基づいた筆者の算出による。

再編して警備隊へ編入することが決められた<sup>54</sup>。しかし、この決定は戦前には実行に移されていない。

日露戦争が勃発した1904年1月27日には、極東太守アレクセーエフ（Е. И. Алексеев）によって警備隊は「中東鉄道の警備全般」<sup>55</sup>の任務につくことを命じられた。さらに同年4月16日には極東太守の命により満洲軍指揮官の統率下に入る<sup>56</sup>。警備隊は4区に分かれて警備を開始し、第1区は西部線（満洲里からハルビン間）、第2区は東部線（ハルビンからポグラニーチナヤ間）、第3区は南満洲支線（ハルビンから開原、開原からポルト・アルトゥール間の2小区）、第4区は松花江沿岸（ハルビンから哈拉蘇々）を担当する<sup>57</sup>。全部隊の半数以上は第3区に配置された。また沿線では嫩江と松花江に架けられた橋梁の警備に重点が置かれる。だが、ロシア軍の兵站を担う中東鉄道は開戦当初から日本軍の攻撃目標であり、早くも1904年4月19日には南満洲支線の海城駅付近で鉄道の橋脚30ヴェルスタが破壊された。路線の修復は早急に終わったものの、この件が鉄道守備の手薄さを知らしめることになり、4月22日にはシベリア第一軍団から2中隊が鉄道の警備に派遣される<sup>58</sup>。これ以後、正規軍や義勇軍から鉄道守備の兵員が増派され、1905年2月には警備隊を含めて5万人以上が鉄道の防衛に割かれるに至った<sup>59</sup>。拡充していた警備隊の規模でも鉄道守備には不足であることが露呈されたと言えよう。このことが、ポーツマス講和会議でロシアが鉄道守備兵の軍縮に強い難色を示した一因と考えられる。

1905年8月16日の講和会議では、「線路財産及運輸に必要な保護を加え」<sup>60</sup>の守備兵数を1キロ当たり5名に制限する覚書が日本側から手交された。これを読んだロシア全権ヴィッテは、満洲が平和を回復して、静謐になったならばこの兵数でも足りるとしたが、今の状況ではこの兵数では不足であると主張した。ヴィッテはこの件については別に交渉の場を設けることを主張し、この日は結論を見ていない。日本の全権小村寿太郎は8月21日の撤兵条件に関する協議でもこの件を持ち出し、同じ制限案を繰り返した。ヴィッテは、この件は両国の軍司令官が別に協議を持つように提案して再び確答を避ける。これに解決を急ぐ小村が、実際は1キロに2、3名の守備兵で十分だと挑発したことがヴィッテの反論を呼んだ。ヴィッテは「僅少ノ兵ヲ駐メ置キテハ一朝事変アル場合ニ安全保護ノ目的ヲ達スルコト難シ」<sup>61</sup>と懸念を表明する。そこで小村は10名に上乗せする案を出す。ヴィッテは20名という対案を出す。小村はこれを一蹴し、中間を取った15名を提案して妥結した。こうしてポーツマス講和条約追加約款第三項により、日本とロシアは鉄道守備の人員

<sup>54</sup> Там же. С. 324-325.

<sup>55</sup> Минаков. Указ. соч. С. 143.

<sup>56</sup> Троцкий В. Заамурский округ пограничной стражи на охране железной дороги в кампанию 1904-1905 гг. // Военный сборник. 1908. №8. С. 76.

<sup>57</sup> Русско-японская война 1904-1905 гг. Т. 1. С. 375.

<sup>58</sup> Русско-японская война 1904-1905 гг. Т. 7-2. С. 147.

<sup>59</sup> Там же. С. 149.

<sup>60</sup> 「日露講和談判筆記」外務省編『日本外交文書』第37・38巻別冊・日露戦争V（1960年）、492頁。

<sup>61</sup> 同上、522頁。

を1キロ当たり15名に制限することが定められた。警備隊の拡大につぐ拡大にも歯止めがかかるかを見えたが、事態はそう動かなかつたことは後述する。

### 3 日露戦争後の軍事バランスの鼎立

講和条約が締結されて、満洲に展開した日露両軍は順次撤退し、鉄道守備兵のみが駐留できることとなった。日本も上記の条項に基づき鉄道警備に当たる部隊を編制する。まずは戦後の満洲における日本の統治組織の変遷について述べておこう。

戦時下における軍政は満洲軍総司令部内の総兵站監部が担った。講和条約の成立に伴って満洲軍総司令部は自軍の撤退後に代替機関を設置することを中央に要望し、1905年9月に関東総督府が遼陽に創立される<sup>62</sup>。関東総督府は満洲駐劄師団と呼ばれる二個師団と大連湾要塞諸部隊を隷下に置いた<sup>63</sup>。しかし、満洲における軍政が継続されたことは清やイギリス、アメリカの反発を招き、伊藤博文韓国統監の主導で問題を討議する「満洲問題に関する協議会」が1906年5月に開催された。協議の結果、「満洲行政の責任は宜しく之を清国に負担せしめねばならぬ」<sup>64</sup>という伊藤の意向が強く反映されて、満洲における軍政は順次撤廃し、関東総督府を平時組織に改めて関東都督府へ改組することとなった。関東都督には「関東州ヲ管轄シ並南満洲ニオケル鉄道線路ノ保護及取締ノ事ヲ掌ル」<sup>65</sup>権限が与えられる。都督府は民政部と軍政部の二部に分かれ、1906年7月に設置された陸軍部は「関東都督ノ所轄内ニ於ケル陸軍一般ニ関スル事ヲ掌ル」<sup>66</sup>と定められた。以後、在満兵力は関東都督が軍を統率し、都督府陸軍部が実務を担当する体制が確立された。

総督府から都督府への移行は満洲駐劄師団の削減を伴った。満洲駐劄師団は上記の2個師団が1907年3月に転出すると、同月からは遼陽に師団司令部を置く1個師団のみが二年交代で駐留した。これを補うように発足したのが独立守備大隊である。独立守備大隊は「関東都督ニ隷シ南満洲鉄道線路（及之ニ付属スル電線其ノ他ヲ含ム以下同ジ）ノ守備」<sup>67</sup>を行うために編制された部隊で、兵は予備役から募集された。独立守備大隊は6大隊で編制され、1907年3月に全部隊が満洲に着任した。関東都督府陸軍部の『明治40年3月第三旬々報』に拠れば、大隊本部は第一から第六まで順に公主嶺、鉄嶺、奉天、鳳凰城、大石橋、瓦房店に置かれた<sup>68</sup>。独立守備大隊の司令部の設置は部隊の着任に一年遅れ、1908年3月の

<sup>62</sup> 中山隆志『関東軍』講談社、2000年、14頁。

<sup>63</sup> 防衛庁防衛研修所戦史部『陸軍軍戦備』朝雲新聞社、1979年、54頁。

<sup>64</sup> 栗原健『対満蒙政策史の一面：日露戦後より大正期にいたる』原書房、1966年、23頁。

<sup>65</sup> JACAR(アジア歴史資料センター)Ref. A03020679800 (第2画像目)、御署名原本・明治39年・勅令第196号・関東都督府官制(国立公文書館)。

<sup>66</sup> JACAR. Ref. A03020680600 (第2画像目)、御署名原本・明治39年・勅令第204号・関東都督府陸軍部条例(国立公文書館)。

<sup>67</sup> JACAR. Ref. C03022855100 (第4画像目)、軍務局・独立守備大隊勤務令制定の件(防衛庁防衛研究所)。

<sup>68</sup> JACAR. Ref. C03022869100 (第4画像目)、関東都督府・40年3月旬報の件(防衛庁防衛研究

軍令により旅順の関東都督府将校集合所内において事務を開始した<sup>69</sup>。その後、大隊司令部は公主嶺や奉天に移り、各大隊の配置も「情勢の動きにより、適宜変更」<sup>70</sup>される。こうして、1907年に日本の在満兵力は満洲駐劄師団1個と独立守備大隊6個に定まり、約1万400人を上限として1931年まで推移する<sup>71</sup>。なお、陸軍省軍事課が作成した大隊の編制原案では部隊に「鉄道守備大隊」という名称を冠していたが、寺内正毅陸相の査閲後に鉄道の文字上には全て「独立」と上書きされている。「鉄道守備大隊」と称する部隊を作ってしまうのは「正規軍」、すなわち満洲駐劄師団の存在理由が疑われ、「我軍備ニ関シ列国ヲシテ疑義ヲ抱カシメ」<sup>72</sup>という理由であった。都督府への改編と共に、この改名は満洲で日本がまだ各国の目を憚っていた証左であろう。同時に、正規軍ではないことを装ってより多くの「軍隊」を満洲に進駐させたのは、ロシアの手法と相似である。

日露戦争で戦場となった満洲は清朝の故地であり、当然清に及ぼした影響も大きかった。清は満洲の封禁を緩和して行政を改革し、植民を進め、軍備を増強して両国と対抗しようとする<sup>73</sup>。中でも満洲の軍再編を主導して、地域の主権を回復する試みの中心にいたのは袁世凱だと思われる。袁世凱は李鴻章を継いで1901年から北洋大臣兼直隸総督の任にあり、日露戦争前後の清において兵馬の権を握っていた。彼が直隸と山東省に配置していた北洋六鎮（以下、北洋軍）は近代化を施された軍隊で、1904年初頭には6万人以上が指揮下に置かれていた<sup>74</sup>。袁は1905年11月に清国全権の一人として戦後の満洲に関する日清交渉に臨み、「該地方（筆者注：満洲）ニ（筆者注：日露）両国ノ兵ヲ駐ムルコトハ最モ騒乱ノ起ル原因」<sup>75</sup>で、「満洲ニ於ケル官民等ガ満洲ニ外国兵ノ在ルコトハ非常ニ困難ヲ受クル」<sup>76</sup>と主張し、鉄道守備は清国軍が代わって行うので、日本軍は撤退してもらいたいと迫った。だが、日本の全権小村寿太郎は講和会議の経緯を説明して日本軍の駐留を譲らない。結局、締結した「満洲ニ関スル日清条約」の付属協定第二条では「若シ満洲地方平靖ニ帰シ外国人ノ生命財産ヲ清国自ラ完全ニ保護シ得ルニ至リタル時ハ日本国モ亦露国ト同時ニ鉄道守

---

所)。

<sup>69</sup> 岩手県独歩会編『満洲独立守備隊史』岩手県独歩会、1971年、49頁。

<sup>70</sup> 防衛庁防衛研修所戦史部『関東軍(1)』朝雲新聞社、1969年、14頁。なお、同書は大隊司令部の配置を「終始、公主嶺に位置し」としているが、『満洲独立守備隊史』の記述から誤りと推定される。

<sup>71</sup> 中山は「満洲事変まで、合計1万400名程度が満洲における常備兵力であった」（『関東軍』、19頁）と断じているが、独立守備大隊は1925年に2大隊が削減されるなど、その兵数は流動的であった。防衛庁防衛研修所戦史部『関東軍(1)』、14頁。

<sup>72</sup> JACAR. Ref. C03022855000（第24画像目）、軍務局・独立守備大隊編成要領制定の件（防衛庁防衛研究所）。

<sup>73</sup> 康沛竹「日俄戦争後の清廷東北防務」『近代史研究』第3期、1989年、77頁。

<sup>74</sup> Jerome Chen, *Yuan Shih-kai, 1859-1916: Brutus Assumes the Purple* (Stanford, Calif.: Stanford University Press, 1961), p. 79（守川正道訳『袁世凱と近代中国』岩波書店、1980年、86頁。）。

<sup>75</sup> 「満洲ニ関スル日清条約締結ノ件」外務省編『日本外交文書』第38巻第1冊（1958年）、279頁。

<sup>76</sup> 同上、280頁。

備兵ヲ撤退スベシ」<sup>77</sup>と撤兵条件が定められるに留まった。外交交渉により満洲から外国軍を一扫できなかった事は、袁が次に述べる現地の軍政改革を推進した一因と思われる。

日露戦後の満洲における清の兵力は、八旗兵を除いて奉天・吉林に各2万弱、黒龍江に4千弱という配分であった<sup>78</sup>。しかしその兵は、軍紀も緩く兵器にも不慣れで、新たに編制した軍にもアヘンが蔓延していた<sup>79</sup>。このような満洲の軍改革には、行財政改革に辣腕をふるった盛京將軍趙爾巽も手をつけているが、本格的に始動するのは東三省総督徐世昌が赴任してからである。東三省総督は、1906年に東三省視察大臣に任じられた徐世昌が袁との協議の後に上奏して創設されたもので<sup>80</sup>、盛京や吉林、黒龍江の駐防將軍職に代わって1907年に設けられた東三省（奉天、吉林、黒龍江）を統轄した<sup>81</sup>。総督の徐は袁の若い頃からの親友であり、省ごとに置かれた巡撫職にも袁に連なる人材が送り込まれた<sup>82</sup>。こうした満洲の新人事について報告した北京のロシア公使ポコチーロフ（Д. Д. Покотилов）は、「満洲統治問題は直隸総督袁世凱に握られることになるだろう」と結論付けている<sup>83</sup>。

1907年の徐の赴任と共に北洋軍の満洲移駐も始まり、清の軍備増強は加速した。北洋軍の陸軍第三鎮（軍官佐748名、兵夫1万1788名）は直隸省から吉林省、奉天省昌図に移駐した<sup>84</sup>。同じく1907年に奉天に進駐した陸軍第二混成協（5109名）<sup>85</sup>は北洋軍第二、四鎮から選抜された兵で、両鎮は北洋軍の主力であった<sup>86</sup>。新民府などに駐在した陸軍第二混成協（5109名）もまた北洋軍第五、六鎮からの選抜兵である。1907年までに満洲で再編されたのは、吉林陸軍歩兵第一協と奉天陸軍第一、二標などで軍備の中心は北洋軍であった。徐は移駐した軍と合わせて約5万人を満洲各地に配置する<sup>87</sup>。

上記の日清両国の戦後体制の確立と軍の再編をロシアはどのように捉え、警備隊にはどのような影響を及ぼしたのか。原暉之が指摘したように、ロシア側が強い懸念を示したのは清の動向である<sup>88</sup>。中でも、原の示唆する第一次日露協商が果たした役割は見逃せない<sup>89</sup>。

<sup>77</sup> JACAR. Ref. A03020693900（第7画像目）、御署名原本・明治39年・条約1月29日・日清間満洲ニ関スル条約（国立公文書館）。

<sup>78</sup> 澁谷由里「奉天省における革命の『挫折』：地方軍維持経費をめぐる考察を中心に」『近きに在りて』第39号、2001年、174頁。

<sup>79</sup> 康「日俄戦争後の清廷東北防務」、85頁。

<sup>80</sup> 西村成雄『中国近代東北地域史研究』法律文化社、1984年、60頁。

<sup>81</sup> 戴逸編『二十六史大辭典：典章制度卷』吉林人民出版社、1993年、377、890頁。

<sup>82</sup> 西村『中国近代東北地域史研究』、60頁。

<sup>83</sup> A. R. ソコロフ「20世紀初頭の満洲行政改革」伊藤友恵訳『環日本海研究年報』第12号、2005年、50頁。

<sup>84</sup> 徐世昌撰、李樹田校点『東三省政略』吉林文史出版社、1989年、640-642頁。

<sup>85</sup> 同上、648-649頁。

<sup>86</sup> 澁谷「奉天省における革命の『挫折』」、175頁。これに対しチェンは、北洋軍で袁が特別な重要性を持たせていたのは第四、六鎮であったと述べる。Chen, op. cit., p. 77. いずれにせよ、満洲への移駐兵には北洋軍の精鋭が選抜されたことになる。

<sup>87</sup> 康「日俄戦争後の清廷東北防務」、86頁。

<sup>88</sup> 原暉之『シベリア出兵：革命と干渉（1917-1922）』筑摩書房、1989年、39-40頁。同「日露戦争後のロシア極東：地域政策と国際環境」『ロシア史研究』第72号、2003年、12頁。

<sup>89</sup> 原「日露戦争後のロシア極東：地域政策と国際環境」、12頁。

1907年7月17日に結ばれた日露協商は、両国がポーツマス講和条約で生じた権利を互いに尊重すること謳っており、ロシアが日本より清の軍事動向をより注視する結果になったと推測されるためだ。また本論で述べたように、日本の在満兵力は約1万、東三省総督が隷下に置いたのは約5万であるから、ロシア側が強く意識するのが清の軍事動向であるのは理に適う。例を二つ挙げる。1905年10月に直隸省河間府で行われた北洋軍の軍事演習を観閲したロシア軍参謀は、観戦記を認めて清軍全体の分析を行った。中でも北洋軍の兵士は「酒を飲まず、忍耐強く、素晴らしい健康と気力に恵まれ、従順で、死に対し冷静だ。優秀な将校の手にあればその兵は容易ならぬ敵となろう」<sup>90</sup>と高く評価している。そして序文ではこの「覚醒した隣人であり復興した帝国」<sup>91</sup>の軍に注意を促した。中東鉄道の東部線を預かる第三旅団参謀長として日露戦争中まで警備隊に籍を置いたデニーキンもまた北洋軍には注意を払っており<sup>92</sup>、清に比べて「極東のロシア軍の少なさと際立った（筆者注:低い）質は国家の重要事項の中で切実な問題である」<sup>93</sup>と述べ、その増強を求めた。

講和条約の結果、中東鉄道は寛城子以南の路線を失い、総延長は1613.1ヴェルスタとなった<sup>94</sup>。警備隊の員数に換算すると、その上限は約2万5800人になる。これを受けて、1907年10月14日に警備隊は歩兵中隊52個、騎兵中隊42個、砲兵中隊4個、訓練部隊25個に再編制された<sup>95</sup>。1901年に比べると部隊数は確かに削減されている。しかしその戦闘員数は1910年の時点で将校586名、兵卒2万1110名で、馬匹は6600頭を有していた<sup>96</sup>。また、1907年10月30日に警備隊に編入されていたザアムール鉄道大隊は、1911年から13年の間には7890名で推移した<sup>97</sup>。このように、警備隊は日露戦争後にその管轄領域を大幅に縮小したにも拘わらず、総員数は講和条約の規定を逸脱した約3万人にまで迫り、戦前の規模を大幅に上回って展開していた。

<sup>90</sup> Первые большие маневры китайской армии в октябре 1905 г. изд. штаба войск Дальнего Востока. Харбин. 1906. С. 14.

<sup>91</sup> Там же. С. vi.

<sup>92</sup> Деникин А. И. Русско-китайский вопрос: Военно-политический очерк. Варшава. 1908. С. 23-28. 彼の警備隊在職時の役職については Байков Н. А. Записки замурца: Воспоминания Н. А. Байкова: Маньчжурия 1902-1914 гг. Избранное // Россияне в Азии. 1997. №4. С. 82. バイコフも1902年に赴任してから第三旅団に属し、デニーキンは直属の上官であった。

<sup>93</sup> Деникин. Указ. соч. С. 40-41.

<sup>94</sup> 満洲里からウスリー鉄道との接続点までが 1389.57 ヴェルスタ、ハルビンから寛城子までが 223.53 ヴェルスタである。Тищенко П. С. Китайская Восточная железная дорога 1903-1913 гг. Харбин, 1914. С. 165.

<sup>95</sup> Нилус. Указ. соч. С. 513.

<sup>96</sup> Там же. С. 513.

<sup>97</sup> 編入の日付については、Плеханов. Указ. соч. С. 32. 鉄道大隊の員数については、Белов Е. О вводе русских военных отрядов в Китай в 1911-1913 гг. // Проблемы Дальнего Востока. 1998. №1. С. 118.

## 結び

中東鉄道警備隊は鉄道大隊の代替として構想されたが、期待された労働力としての役割を担うことはなかった。結果として、部隊は沿線の防衛任務に特化した会社の警備員となる。とはいえ、隊員は現役の軍人から成っており、警備隊は実質的な軍隊であった。曖昧なその地位は、義和団蜂起の戦闘後に大蔵省管轄の独立国境警備軍団に編入されることで確定した。日露戦争では鉄道の破壊を企図する日本軍と交戦する。こうした活発な軍事行動と、ヴィッテをはじめとする政府要人の満洲に対する危機意識の高まりに比例して、警備隊の規模は拡大につぐ拡大を続けた。これに枷をはめたのがポーツマス講和条約である。講和条約は、1907年に日本が鉄道警備を行う独立守備大隊と満洲駐劄師団を編制することも許した。同年には清朝も東三省総督を創設して北洋軍を移駐し、満洲の地域防衛を強化する。日本と清の軍事的台頭の中で、ロシアの軍人たちが深刻にとらえたのは急速に規模と質を向上させる清軍、とりわけ北洋軍の動きである。これに対して1907年には警備隊も再編制を行い、3万近い兵力を維持して、満洲における軍事バランスの一角を占め続けた。

満洲に進駐した初めての外国軍隊である警備隊は、清の統治が続いていた地域の軍事バランスに変動と緊張をもたらした。日露戦争の結果、満洲におけるロシアの軍事的優位は崩れるものの、それは清が地域の主権を回復することを意味しなかった。1907年に日清露の各国が満洲における戦後体制を確立したことを転機に、満洲の軍事バランスはこの三ヶ国が鼎立する時代へと移行したのである。その中で警備隊は、ロシアが満洲に公式に配置できた唯一の軍事力として、該地域における日本と清の軍備に対抗する役割を担っていたと言えよう。そのために隊員は削減されることなく、講和条約に違反してでも増強されたと考えられる。